

ナースイン花びりか

症 例 概 要 利用者：70代 男性 要介護 5

病名：上行結腸癌の末期、転移性癌腫瘍、進行性核上性麻痺

経過：2021年に進行性核上性麻痺の診断後、誤嚥性肺炎を繰り返し2024年に喉頭摘出術施行。

気管孔からの吸引必要となり元々利用していた通所サービスが受け入れ不可となったため2025年4月より当事業所利用開始。同年9月に大腸癌の診断を受け3か月の余命宣告を受けるも「少しでも長く自宅で過ごしてあげたい」という妻の思いから翌月に自宅へ退院。

当時は苦痛症状が出現した場合は再入院の方向となっていたが、往診医の変更や手厚い訪問サービス、ご本人が好きだった入浴支援を継続することにより宣告された余命よりも長く過ごし、最期も自宅で迎えられた症例。

内 容

ご利用者は、テニスクラブの監督を務めるなど、これまで身体を動かし、人と関わることを大切にされてきた方です。ベッド上での生活となった後も、「何かに参加したい」というお気持ちは変わらず、理学療法士を中心としたリハビリスタッフと相談を重ね、工夫を凝らして特製のボール転がし機を作成しました。その取り組みの結果、介護スタッフやリハビリスタッフの支援のもと、石狩市独自のボッチャ大会に出場され、見事優勝を果たされました。

また、お誕生日には、看護師・介護スタッフの調整のもと、奥様とご一緒にナースイン花びりかで行われたボランティアによるフラダンス披露に参加され、夫婦で穏やかな時間を過ごされました。

しかし、9月に大腸がんが発覚し、主治医より末期がんとして余命3か月に宣告されました。医師の判断によりCVポート造設し、高カロリー輸液が開始されましたが、疼痛コントロールが難しい状況であったことから、医師・看護師より在宅での看取りは困難であるとの説明を受けました。

それでも奥様は、「少しでも長く自宅で過ごしてほしい」という強い思いを持たれ、看護・介護スタッフと相談を重ねたうえで退院を選択されました。

退院後は、看護師による訪問看護サービスを、通い以外の日には毎日導入し、体調管理や排便コントロール、清潔ケアを行いました。また、介護スタッフやケアマネジャーとも連携しながら、ご家族への精神的支援を含めた支援を多職種で継続しました。さらに、主治医の判断とケアマネジャーの調整により、往診医を終末期の疼痛管理に強い在宅医療クリニックへ変更し、医師・看護師・介護職が連携してご利用者ができる限り自宅で過ごせる体制を整えました。

終末期支援の一環として、ご本人の人生史を寸劇で再現する企画を立案し、奥様の協力のもとスタッフ全員で実施しました。ご本人に代わり奥様へ感謝を伝える場面では、深い絆が感じられました。余命宣告の時期を超え、クリスマスやお正月を自宅で迎え、ハンドベルや獅子舞を楽しむ「輝きのある1日」を重ねることができました。